

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12607

研究課題名(和文) アジア太平洋戦争下の女性詩 加害と被害、ジェンダー、イデオロギーを巡る総合的研究

研究課題名(英文) Gender and Ideology in Japanese women's poetry of the Asia-Pacific War

研究代表者

菊地 利奈 (Kikuchi, Rina)

滋賀大学・経済学系・教授

研究者番号：00402701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：アジア太平洋戦争下の女性詩研究としてスタートした本研究は、当初の計画にあった永瀬清子や江間章子など戦中に詩を発表した詩人に加え、戦前の女性詩人(左川ちか)、戦争のレガシーやトラウマを扱った戦後詩人(新藤涼子、石川逸子、ぱくきょんみ等)を含む、日本語女性詩における問題をジェンダーとイデオロギーの視点から分析する研究として発展。

日英対訳詩集1冊を思潮社より出版、オーストラリアとアメリカで出版されたアンソロジー2冊に英訳収録、国際学会での発表3回、キャンベラでのラジオ番組出演や翻訳ワークショップ講師、国内外の詩誌・文芸誌への寄稿、滋賀大学におけるワークショップ開催等の成果をあげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語女性詩の国際的な研究の発展に貢献するために、英語詩人と共同プロジェクトを立ち上げ、多くの女性詩人の作品の英訳をすすめた。戦中に女性詩人が発表した戦争協力詩を含む戦争詩については国内外で研究がすすんでいないため、これらの詩の英訳を含む英語論文を発表。また、これらの英訳詩を、キャンベラ、サルデーニャ、トビリシなど国外で開催された国際学会、大学授業、ラジオ番組や朗読会で紹介し、日本語女性詩への国際的な理解が深まるようつとめた。また、日本語詩の翻訳ワークショップを開催するなど、公開講座を複数回担当。国内においても、朗読会やワークショップを一般公開として複数回開催し、知識の社会還元につとめた。

研究成果の概要(英文)：My research on women's poetry of the Asia-Pacific War expanded to the wider literary era, including some pre-war woman's poetry in 1930s, post-war women's poetry on the legacy of war and contemporary women's poetry. During my 4-year research, I managed to publish poetry translations of Japanese women poets in two anthologies (Action Books and MVmedia) and varieties of international poetry journals, edited and published the translations of Sagawa Chika's poems (Shichosha), presented at three international conferences in Tbilisi, Canberra and Tokyo, organized multiple poetry workshops and poetry readings in Canberra and Shiga, and started a few co-research projects.

研究分野：文学

キーワード：フェミニズム ジェンダー 比較文学 翻訳論 戦争詩 女性詩 アジア太平洋戦争 現代詩

## 1. 研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争中、特に1937年の日華事変以降から45年の敗戦にかけて、男性詩人と競うかのように多くの女性詩人が次々と詩作品を発表した。にもかかわらず、それらの「戦争詩（愛国詩・国民詩）」はまったくというほど研究されていないことに着目し、申請者がこれまでおこなってきた1920 - 30年代の戦前女性詩研究を40年代にまで発展させようと、本研究は開始した。

戦中女性詩を「空白」と定義し、存在しなかったかのように扱うことは、女性詩人らを「母性」や「乙女」といったステレオタイプに閉じ込め、母性神話を再構築することにつながる恐れがある。女性が男性同様プロパガンダ詩を多く発表して国政に協力したことをふまえたうえで、「戦争詩」というジャンルから排除されてきた女性詩人たちの作品の見直しをはかることを目的として研究をすすめた。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語女性詩における〈戦争と女性〉というテーマの見直しをはかり、国内外における日本語女性詩研究の発展に貢献することを目的とした文学研究である。現在読むことさえも困難になっている女性詩人らの戦争協力・賛美詩を収集調査した上で英訳し、母・乙女・真心・慰問等ジェンダーバイアスのかかった詩的イマジエリに注目しながら、言論弾圧や検閲、イデオロギー、ジェンダーが詩的表象・表現に与えた影響を分析し、各女性詩人が「戦争」をどのようにとらえ描いたか、考察をすすめた。

## 3. 研究の方法

本研究には、ふたつの柱がある。ひとつはジェンダーをめぐる（女性）詩の分析と考察。もうひとつは、それらの詩作品の英訳である。詩の英訳は、日本語女性詩研究を国際的にすすめていくうえで欠かせないものであり、本研究でも重要な位置を占める。

本研究は、まず題材となる詩の収集から始まった。アジア太平洋戦争中に活躍した25名ほどの女性詩人らが発表した戦争協力・賛美詩、エッセイ、従軍・慰問日記等を、文芸文学誌、一般婦人雑誌、新聞等から収集。その後、これらの女性詩人らの作品の中から鍵となる作品を日本語から英語に訳し、解説や改題をつけて、国際詩誌に発表した。

研究の過程で、戦前・戦中・戦後に区切ることに問題があることがわかり、戦前や戦後のものについても資料収集を開始。戦中に限らず、戦前戦後も含めた、研究に関連する女性詩を英訳。ジェンダー、アイデンティティ、イデオロギーの視点から分析し、国際学会や国内外の詩誌・ジャーナルに発表した。

その他、国内外で一般向けの詩のワークショップや朗読会を開催。詩は研究のためにあるのではなく、読まれることで人間の人生をより豊かにするものであるという信念に基づき、難解であると思われがちな詩に親しんでもらうために、できるかぎり一般公開として開催した。

## 4. 研究成果

本研究は、アジア太平洋戦争下の女性詩研究としてスタートしたが、戦中作品にかぎるのではなく、戦中に生まれ戦後に詩を書き始めた女性の戦争体験が反映した詩作品にも分析をひろげ、戦後生まれの女性詩人が描く戦争のレガシー、性をめぐる暴力やトラウマをめぐる詩作品へと研究が発展した。女性詩人の作品にあらわれる戦争と（性にまつわる）暴力の分析を通して、その被害性とともに加害性を明らかにすることで、戦前／戦中／戦後の詩作は切断されていないことが明らかにできるのではないかと考えている。

成果としては、戦前の女性詩人のパイオニアのひとりである左川ちかの対訳詩集を『対訳左川ちか 選詩集 Selected Translations of Sagawa Chika's Poems』（2023年、思潮社、菊地利奈編、菊地利奈＋キャロル・ヘイズ共訳）を出版。左川の友人で同じくモダニズム詩人であった江間章子や、英美子や深尾須磨子らが1930年代に発表した戦中詩を中心とした分析を、2019年11月開催の日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会にて、

「Women's War Poetry 研究における日本女性詩人によるアジア太平洋戦争詩がしめる位置と意義 フェミニズムとインペリアルイズムの視点から」として発表した。この発表をさらに発展させ、詩を英訳したうえで、英語論文「Early Women's Poetry of the Asia-Pacific War: Poems from Contemporary Women-stream Poets Anthology」を『彦根論叢』（2019年）に掲載

した。また、 依頼を受け、戦前、戦中、戦後、書き続けた永瀬清子が 1942 年に発表した戦争詩「花」等について、「永瀬清子と戦争詩」(『詩と思想』2021 年)を寄稿した。 戦前・戦中に活躍したフェミニスト詩人・生田花世についてのインタビュー記事が「情熱に生きた「新しい女」たち 女流作家・田中古代子と生田花世」として『とっとりNOW (vol.125)』(2020 年)に掲載された。

その他、 Jen Crawford キャンベラ大学准教授と共訳した、石川逸子のアジア太平洋戦争のレガシーを扱った詩の英訳が国際詩誌『Stand』(2019 年)や『Modern Poetry in Translation』(2020 年)に掲載された。Crawford 氏とは 2017 年から共同研究を実施しており、現在 2 冊目の共訳・共編書として、近現代女性詩の日英対訳アンソロジーの準備をすすめている。本研究期間にも、キャンベラ大学での共同講義のほか、ラジオ番組出演や朗読会などにも二人で出演。公開講座で日本語詩の翻訳ワークショップを開催するなど、キャンベラで多くのイベントをこなした。

コロナ禍で、計画していた共同研究や共訳作業が停滞したが、2022 年に入り少しずつ再開。トビリシで開催された国際比較文学学会(2022 年 7 月)では、国内外の研究者と 4 名で女性詩パネル「Narrative, Nation, and World: Contemporary Women's Writing from Japan」を組み、「Poetry as a Means of Survival: Why Do We Still Need "Women's Poetry"？」を発表。オーストラリアで開催された国際詩祭 Poetry on the Move(2022 年 9 月)では、Paul Hetherington キャンベラ大学教授らと「Manoeuvres with Translation」にパネリストとして登壇、日本語詩史における現代女性詩人の位置について論じた。

本研究の二本目の柱にあたる詩の翻訳については、 早稲田大学で開催されたシンポジウム「詩の翻訳、詩になる翻訳」(柴田元幸、伊藤比呂美、四元康祐、藤井一乃、菊地利奈)にパネリストとして出席(<https://www.waseda.jp/flas/gjs/news-en/2373>)。同シンポジウム内容は、『文學界』(2022 年 3 月号)に「詩の翻訳、詩になる翻訳」として掲載された。その他、 詩の共訳についての共著論文「Poetry co-translation and an attentive cosmopolitanism: internationalising contemporary Japanese poetry」(Cassandra Atherton, Paul Hetherington, Rina Kikuchi)がジャーナル『Coolabah: Observatori: Centre d' Estudis Australians i Transnacionals』(バルセロナ大学、2021 年)に掲載された(<https://revistes.uib.edu/index.php/coolabah/article/view/35003>)。

また、共訳詩は随時、『Rabbit』(オーストラリア詩誌)、『Modern Poetry in Translation』(イギリス)、『Tokyo Poetry Journal』(日本)等、国内外のジャーナルに発表した他、アメリカの Action Books から出版された新井高子英語詩集『Factory Girls』(Jeffrey Angles 編、2019 年)、オーストラリアで出版されたアンソロジー『Languages of Water』(Eugen Bacon 編、2023 年)にも収録された。

その他、詩について一般にひろく親んでもらえる機会を提供するために、朗読会や詩作や翻訳ワークショップを開催。 翻訳家の柴田元幸氏とジェフリー・アングルス氏を滋賀大学に招き対面オンライン併用で開催した「詩を訳す、詩に訳す、詩に生きる、詩を生きる ~ 翻訳家が語る詩の世界」(2023 年 1 月)には 120 名以上の参加があった。また、 子どもたちを対象とした夏休み企画としてひらめき きらめきワークショップ『詩ってむずい? 滋賀大学詩作ワークショップ 詩人と一緒に詩を書こう』を開催(<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/ebrisk/2020/mirai/souhatsu/hiramekitokimeki.html>)。 キャンベラ大学・ベルコネンアートセンター共催の日本語詩ワークショップ講師(2022 年 9 月)や、 早稲田大学開催の詩の翻訳ワークショップ「詩の翻訳、詩になる翻訳」(<https://www.waseda.jp/inst/sgu/news/2022/03/10/13272/>)の講師を務めた。

2019 年から 4 年にわたる本研究において、10 年来の共同研究者であったキャロル・ヘイズ(故オーストラリア国立大学教授)と共訳した左川ちかの英訳を対訳集として出版するなど、ひとつの区切りがついた。同時に、ロイヤルメルボルン工科大学の Writer in Residence at WRICE (Writers Immersion and Cultural Exchange, 2021 年)に招かれる等、新しい共同研究仲間を得て、新しい企画をスタートすることもできた。コロナ禍でさまざまな計画変更を余儀なくされた側面もあったが、国内外の詩誌や学会で発表することもでき、これまでの研究・共同研究をさらに発展させるとともに、本研究中に得た新しい出会いを通じた新プロジェクトにむけて今後も精励したい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 11件／うち国際共著 4件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Cassandra Atherton, Paul Hetherington, Rina Kikuchi	4. 巻 30
2. 論文標題 Poetry co-translation and an attentive cosmopolitanism: internationalising contemporary Japanese poetry	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Coolabah: Observatori: Centre d' Estudis Australians i Transnacionals	6. 最初と最後の頁 4, 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1344/co2021304-22	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Alvin Pang, Audrey Chin, Ramya Jirasinghe, Rina Kikuchi et al.	4. 巻 12月
2. 論文標題 WrICE 2021: Writers Ask Writers, Asia Pacific edition	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ARTS EQUATOR: THINKING AND TALKING ABOUT ARTS AND CULTURE IN SOUTHEAST ASIA	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 伊藤比呂美、菊地利奈、柴田元幸、榎木伸明、藤井一乃、四元康裕	4. 巻 3月
2. 論文標題 詩の翻訳、詩になる翻訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 218, 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊地利奈	4. 巻 403
2. 論文標題 永瀬清子と戦争詩	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 詩と思想	6. 最初と最後の頁 74-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rina Kikuchi	4. 巻 422
2. 論文標題 Early Women's Poetry of the Asia-Pacific War : Poems from Contemporary Women-stream Poets Anthology 現代女流詩人集	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 30-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳥飼明子、井上嘉明、菊地利奈	4. 巻 125
2. 論文標題 情熱に生きた「新しい女」たち 女流作家・田中古代子と生田花世	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 とっとりNOW	6. 最初と最後の頁 4-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rina Kikuchi, Melinda Smith	4. 巻 37
2. 論文標題 Listening to the Sea by Fukazawa Rena	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Rabbit: a journal of nonfiction poetry	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 菊地利奈	4. 巻 434
2. 論文標題 「わたし/たち」が安全に語れる場所	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 16-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊地利奈	4. 巻 9
2. 論文標題 伊藤整と左川ちか - 翻訳と創作についての一考 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ねむらない樹	6. 最初と最後の頁 82-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地利奈	4. 巻 65
2. 論文標題 「女性詩」不要な社会を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 75-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地利奈	4. 巻 63
2. 論文標題 わかちあう・いま・つながり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 82-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jen Crawford, Rina Kikuchi	4. 巻 1
2. 論文標題 For You by Ishikawa Itsuko	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Modern Poetry in Translation	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Rina Kikuchi	4. 巻 223
2. 論文標題 'centaurea cyanus' Itsuko Ishikawa translated by Rina Kikuchi	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Stand: Ecopoetics	6. 最初と最後の頁 76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 伊藤比呂美、菊地利奈、柴田元幸、榎木伸明、藤井一乃、四元康裕
2. 発表標題 詩の翻訳、詩になる翻訳 Translating Poetry, Translation as Poetry
3. 学会等名 シンポジウム「詩の翻訳、詩になる翻訳 Translating Poetry, Translation as Poetry」(早稲田大学)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Rina Kikuchi
2. 発表標題 Poetry as a Means of Survival: why do we still need "women's poetry"?
3. 学会等名 ICLA (International Comparative Literature Association) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菊地利奈
2. 発表標題 Women's War Poetry研究における 日本女性詩人による アジア太平洋戦争詩 がしめる位置と意義 フェミニズムとインペリアルイズムの視点から
3. 学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会「文学のサバイバル ネオリベラリズム以後の文学研究」(国際学会)
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 菊地利奈編、菊地利奈訳、キャロル・ヘイズ訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 思潮社	5. 総ページ数 96
3. 書名 対訳 左川ちか選詩集 Selected Translations of Sagawa Chika's Poems	

1. 著者名 ユージン・ペーコン編、Park Kyongmi, Rina Kikuchi, Jill Jones他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 MVmedia	5. 総ページ数 221
3. 書名 Languages of Water	

1. 著者名 ジェフリー・アングルス編、Jeffrey Angles, Jen Crawford, Carol Hayes, Rina Kikuchi, You Nakai, Sawako Nakayasu	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Action Books	5. 総ページ数 99
3. 書名 Factory Girls: Takako Arai	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	クロフォード ジェン  (Crawford Jen)	キャンベラ大学	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アサトン カッサンドラ  (Atherton Cassandra)	ディーキン大学	
研究協力者	スミス メリンダ  (Smith Melinda)		
研究協力者	ヘザリントン ポール  (Hetherington Paul)	キャンベラ大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関